

特集「インタラクション：理論，技術，応用，評価」の 編集にあたって

大野 健彦[†]

本特集は、情報処理学会のヒューマンインタフェース研究会（主査：増井俊之）の企画による、ヒューマンインタフェース/インタラクションに関する特集号である。

本特集は 2003 年 2 月に国立情報学研究所で開催された「インタラクション 2003」(実行委員長：小川克彦，プログラム委員長：暦本純一) に連動した企画であり，シンポジウムで発表された論文，ならびにヒューマンインタフェース・インタラクションに関する基礎から応用まで幅広い分野の研究分野について，広く投稿を呼びかけた．この特集は，97 年から開催されているシンポジウム「インタラクション」に連動して企画された，ヒューマンインタフェース・インタラクションに関する 6 回目の特集である．これまでの特集は「インタラクション」を共同で主催している，グループウェアとネットワーク研究会（主査：星徹）と合同で進めてきたが，本年は特集号スケジュールの関係でヒューマンインタフェース研究会の単独企画となっている．

ヒューマンインタフェース/インタラクションに関する研究は日進月歩であり，また競争も激しいことから，研究成果をタイムリーに論文化する場が望まれている．本特集はその役割を果たすことを目指し，関係各位の努力により 4 月 10 日の投稿締切りからわずか 7 ヶ月で論文誌の刊行までこぎつけることができた．採録された論文の分野も多岐に渡り，タイムリーな研究発表の場としての役割は果たせたものと思う．

本特集はゲストエディタ制により，下記の特集編集委員会の責任で編集を行った．査読の手続きは，11 名のメタレビューが投稿論文を 5 本担当し，各編 2 名（テクニカルノートは 1 名）の査読委員の並列査読の査読報告に基づいてメタレビュー処置案を作成し，特集編集委員会において慎重に審議の上，採録/不採録/条件付採録を決定した．投稿された論文は全 55 編（うちテクニカルノート 2 編）で，うち 2 編は途中で取り下げられた．著者，査読者，編集委員の迅速な対応に

より，最終的に 26 編の論文が採録となった．採録率は 47% である．

ヒューマンインタフェースやインタラクションに関する研究は，その価値を文章で分かりやすく表現することや，有効性を客観的評価実験によって実証することが困難であるという問題にしばしば直面する．内容は斬新でありながら旧来の表現手法の限界に縛られ，論文として研究成果を残す機会が奪われるとすれば大変残念なことである．そこで，本特集号の編集委員会では，一般の論文では採録が困難と思われる論文についても，その価値を積極的に評価する方向で検討を進めた．特に査読者の評価が分かれた論文については原著を参照の上，慎重に検討を行った．しかしながら，内容的には興味深いものの，完成度が採録水準に達していない，研究の位置づけが曖昧であるなどの理由から最終的に採録に至らなかった論文が残念ながら幾つか見受けられた．これらの論文については，ぜひ内容を再検討の上，再投稿を期待する次第である．

最後に本特集は，上述したとおり，あまり例のない短期間のスケジュールで進められた．そのため，著者の方々のみならず，査読者，編集委員ならびに事務局の皆様にも過大な負担をおかけすることとなった．この場をお借りして，特集号の実現にご尽力いただいた皆様に心より感謝の意を表します．

「インタラクション：理論，技術，応用，評価」特集編集委員会

- 委員長
大野健彦 (NTT)
- 編集委員
小池英樹 (電気通信大)，椎尾一郎 (玉川大)，角康之 (京大)，垂水浩幸 (香川大)，中小路久美代 (東大)，西本一志 (北陸先端大)，福本雅朗 (NTT ドコモ)，増井俊之 (産総研)，間瀬健二 (名古屋大)，暦本純一 (SONY CSL)

[†] NTT コミュニケーション科学基礎研究所